

性惚院

―不感症の人妻、禁じられた快樂治

療―

目次

はじめに

第一章 予約の扉

第二章 契約

第三章 骨盤矯正と開脚

第四章 乳首への最初の刺激

第五章 乳首ピアッシング

第六章 帰宅後の疼き

第七章 第二回予約の決意

第八章 第二回施術 ― 疼きの再訪 ―

第九章 蜜穴の目覚め

第十章 治療後の余韻と予感

神木真夜 観測総括（第一段階）

あとがき

これは、佐伯美咲という一人の人妻が、
「治療」という名の甘い泥沼に沈んでいく過程を描いた初
期記録である。

感情と身体の変化を、
できる限り丁寧に追う。

ここではまだ、
物語の形を保っている。

第一章 予約の扉

佐伯美咲二十八歳は、
スマートフォン画面を何度も見返しながら、
細い路地の奥に立っていた。

——性惚院 完全予約制
鍼灸・整骨

看板は控えめで、
普通の人なら通り過ぎてしまいそうなデザインだった。

美咲がここを知ったきっかけは、
ネットの口コミサイトだった。

「夫との夜のことが……
最近、全然感じなくて……」

そんな悩みを、
誰にも相談できずにいた美咲にとって、
その一文は藁にもすがる思いだった。

深呼吸を一つして、
ガラスの扉を押し開ける。

中は、予想以上に落ち着いた空間だった。

薄暗い間接照明。

かすかに香るハーブの匂い。

そして、静寂。

待合室のソファに座っていると、
奥から足音が近づいてきた。

「……こんにちは。

佐伯美咲さんですね」

低く、穏やかな男の声。

白衣を着た男が、
静かに微笑みながら立っていた。

長髪を後ろで緩く束ね、
銀縁眼鏡をかけた痩せ型の長身。

四十歳ぐらいだろうか。

知的な雰囲気が漂うが、
どこか影のある目をしている。

「院長の神木真夜と申します。

初めてのご来院、

ありがとうございます。

どうぞ、こちらへ」

個室の診察室へ案内され、

美咲は緊張しながら椅子に腰を下ろした。

神木は向かいに座り、

カルテに目を落としながら穏やかに言った。

「本日は、

夫婦生活のお悩みとのことですが……

話せる範囲で結構ですので、

詳しくお聞かせいただけますか？」

美咲は膝の上で、

指を強く握りしめた。

神木は急かさず、

優しい声で続ける。

「たとえば、

夫婦の営みはどのくらいの頻度でしょうか。

感じにくい部分がありますか？

痛みや、

途中で気持ちが続切れてしまうようなことは？」

美咲は顔を赤らめながら、
か細い声で答えた。

夫とのセックスが、
月に一〜二回程度であること。

ほとんど感じられず、
身体が強張ってしまうこと。

触れられると、
すぐに拒絶反応が出てしまうこと。

神木真夜は静かに頷きながら、
丁寧にメモを取っていた。

「ありがとうございます。

とても勇気を出して、
お話しくださいましたね」

神木はカルテを閉じ、
穏やかな笑みを浮かべた。

「では、

まずは身体の方を診ていきましょう。

施術着に着替えていただきます。

こちらの施術着をお使いください」

神木が差し出した施術着を見て、
美咲は息を飲んだ。

薄い、白い布地。

ほとんど透けてしまいそうな、
頼りない一枚の布きれだった。

「……これを、
着るんですか？」

声が震えた。

神木真夜は、
穏やかに頷く。

「はい。

正確に身体を診るためには、
なるべく素肌に近い状態が理想なんです」

美咲は唇を噛み、
施術着を握りしめた。

この薄い布を着て、
この男の前に立つこと。

それが、

今日ここに来た最初の試練のように感じられた。

第二章 施術着と最初の診察

美咲は個室の隅にあるカーテンの向こうで、震える手で服を脱いだ。

上着を脱ぎ、

ブラウスのボタンをゆつくりと外していく。

白いブラジャーに包まれた胸が露わになり、続いてスカートを下ろす。

薄い紫のフルバックパンティに包まれた腰つきと、黒いストッキングに覆われた太ももが現れた。

美咲はためらいながら、ブラジャーのホックを外す。

さらに、

パンティとストッキングも脱いだ。

完全に裸になった身体を鏡に映し、小さく深呼吸をする。

差し出された施術着は、想像以上に薄かった。

白く、

ほとんど透けるような生地。

着た瞬間、

乳首の色や股間の輪郭が、

ぼんやりと浮かび上がるのが自分でもわかった。

「……こんなのを着て、

本当に診察できるんですか？」

カーテンの外から、

神木真夜の穏やかな声が返ってくる。

「はい、大丈夫です。

正確に身体の状態を見るためには、

どうしても素肌に近い状態が理想なんです。

ご不安でしたら、

いつでもおっしゃってくださいね」

「……着替え終わりました」

美咲は深呼吸をして、

カーテンを開けた。

——美咲はまだ、

診察室や更衣スペースに設置された盗撮カメラの存在に気づいていなかった。

本編第二章に続く